

第4回 北海道・札幌2030 オリンピック・パラリンピック プロモーション委員会

会 議 録

日 時：令和4年（2022年）9月8日（木） 午前9時00分 開会

場 所：ニューオータニイン札幌 2階 鶴の間



北海道・札幌

冬季オリンピック・
パラリンピック
の招致を目指しています



1. 開会・岩田会長挨拶

事務局 開始時間となりましたので、ただ今から第4回北海道札幌2030オリンピック・パラリンピック・プロモーション委員会を開会いたします。
(梅田スポーツ局長)

私は本日司会進行を務めさせていただきます札幌市スポーツ局長の梅田です。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、本日の会議はペーパーレスな会議とするために資料の配付は最低限とし、会場参加されている委員の皆様にはお手元のiPadやご自身のパソコンで資料をご覧ください。

iPadの説明は机上に配付しておりますのでご覧ください。ご協力いただきましてありがとうございます。

それでは、次第に沿って進めさせていただきます。はじめに岩田会長よりご挨拶をお願いいたします。

岩田会長 皆様、おはようございます。岩田でございます。

皆様におかれましては、大変お忙しい中お集まりをいただきまして誠にありがとうございます。

札幌、北海道におきましては、この7月から9月の間、機運醸成の取り組み集中期間といたしまして、地元の招致期成会を中心に、様々なイベントなどで招致PR活動に取り組んできたところでございます。

このプロモーション委員会も4回目となりました。特に機運醸成につながる議論を深めていくことが重要でありますので、開催意義の議論に加えまして、市民・道民・国民から理解と共感を得るために、これまでの議論をわかりやすく発信するための“メッセージ”とメッセージを一言で表す“スローガン”を策定したいと考えております。本日の会議で議論をいただきたいと思います。

特に今回策定をいたしますメッセージ、スローガンは、狙いを定めた対話移行後の国内外のプロモーションにも活用していくということになりますので、皆さんの忌憚のないご意見をいただきたいと思います。

どうぞよろしく願いをいたします。

それでは、本日どうぞよろしく願いを申し上げまして、冒頭のご挨拶とさせていただきます。

事務局

ありがとうございました。

(梅田スポーツ局長)

次に、本日の出席者でございますが、お配りさせていただいた委員名簿のとおりでございます。

なお、鈴木副会長の代理として小玉北海道副知事が出席されております。

また、秋辺委員、太田雄貴委員、荻原委員、片山委員、竹中委員、日比野委員、三屋委員、本橋委員、文字委員、渡邊委員はご欠席でございます。

それでは議事に入りたいと思いますが、議事進行については岩田会長にお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

岩田会長

はい。それでは、早速であります。議事に入らせていただきます。

山下会長代行

岩田会長、ちょっとよろしいでしょうか。

岩田会長

山下会長代行、ご発言をどうぞ。

山下会長代行

私の方で、ちょっと冒頭に皆様にご報告させていただきたい案件がございます。

東京2020大会の元理事が受託収賄容疑で逮捕されたこの事案。これは、現在の招致活動とは直接の関係はございません。

しかしながら、本件によりましてオリンピック・パラリンピック全体のイメージが大きく損なわれてしまっている。このことは招致活動を進めております札幌市、それから我々JOCも認識しております。

招致のプロセス、これに関しては、既に簡易でコストのかからないものとなっております。現在の招致活動もこの考え方のもとで進めているところでございます。

一方、現在の状況これを踏まえますと、まだ招致の段階ではあるものの、決定後の大会の組織及び運営面におきまして、透明性、公

正性、これを確保して改革にしっかりと取り組んでいく、この決意を示していくことが必要であるところを考えました。

秋元市長とともに、今お手元に配付させていただきました宣誓文を取りまとめました。

事案の事実関係、これについては捜査中でありまして、現時点で報じられている事実関係をベースに再発防止策、これを議論することは、捜査にも影響を与えかねず避けるべきであると考えています。

ただ、一方、招致活動を継続するからには、この機会に大会の運営における透明性、公正性の確保、これについての姿勢をしっかりと示していく、このことが必要であるところと考えております。

このために、宣誓文におきましては、スポーツ庁策定のスポーツ団体ガバナンス行動等を踏まえ、対外的な説明責任を果たすための体制をいかに整えていくか、そのために、以下の3点について検討を行う、このことを掲げております。

1つ目でございます。組織委員会理事会の規模それから役割。また、役員候補者選定委員会による役員の選考等。

それから2つ目でございます。利益相反に関する考え方の明確化、及び利益相反取引の管理体制の整備。

それから3つ目。マーケティング事業、これにおける広告代理店の役割、意思決定のあり方等。

今後、招致が成功し開催が決定した際には事案の推移も踏まえつつ、より具体的な対応策、これを関係機関も巻き込んで議論しクリーンな札幌大会。これを目指してしっかりと発信していきたい。こう考えております。以上でございます。

岩田会長

はい、ありがとうございました。

秋元会長代行

会長、私からも一言よろしいでしょうか。

岩田会長

秋元会長代行、どうぞ。

秋元会長代行

札幌市長の秋元でございます。

今回の東京2020大会の組織委員会の元理事が受託収賄で逮捕され

たということがあった後、さまざまな報道がなされておりまして、このことは、直接2030年の招致活動とつながるものではありません。けれども、オリンピック・パラリンピックというものの全体のイメージを大きく損なうことになったというふうに考えておりまして、今回の招致を目指す都市の市長としても大変心を痛めているところであります。

東京大会では、コロナ禍という大変な状況の中ではありましたが、けれども、その困難を乗り越えて前を向いて進んでいくひたむきな姿、このアスリートの姿、このことに多くの国民が感動を勇気を与えていただいたというふうに思っております。

加えて、共生社会でありますとか、多様性、こういった社会の課題解決に向けた種（タネ）ということも多く、東京大会ではあったというふうに認識をしております。

こういったことを、さらに発展をさせていく、広げていく、そういったためにも、この2030年の大会の招致を目指していきたいというふうに思っているところでありまして、今、札幌市はJOCとともにIOCとの対話を進めているところであります。

招致を成功させるためには、多くの国民の皆さん、地元市民をはじめとして、多くの方々に支持をいただくということ、これが成功に向けての大きな鍵なわけでありまして。

そういったことのためにも、やはり透明性、公平性ということがしっかりと担保された大会運営でなければいけない、このように考えているところであります。

様々な経費の問題であるとか、いろいろな懸念に対して丁寧に説明をしていくということと同時に、クリーンな大会ということ、しっかりと発信をしていかなければいけないとこのように考えているところであります。

具体的には、この組織委員会が立ち上がって、設立後の運営ガバナンスの問題ではありますけれども、この招致の段階から、そういった設立後の運営などについて、いかにこの透明性、公平性を確保

し、国民の信頼を得ていくのかということについて、JOCとともに検討を進めていきたい、このように考えているところでありまして、今回、山下会長とこういう決意を、改めて表明をさせていただいたということでございます。

委員の皆様方のご理解ご協力をお願い申し上げたいと思います。
以上です。

岩田会長

ただいま山下会長代行、秋元会長代行からご発言がございました。

本件につきまして、皆様から何かご発言はございますでしょうか。 はい。高橋委員どうぞ。

高橋委員

高橋でございます。ありがとうございます。

今、山下会長、そして秋元市長からのお話でしたが、真実はこれから捜査あるいは司法の場で明らかになってくることでございますので、今議論する必要はないと思うのでありますが、しかしながら冬季のオリンピック・パラリンピックを誘致する我々の立場からすれば、市民の皆様方のご理解、道民の方々のご理解、国際的なご理解、こういったことを進めていくために、山下・秋元両氏の間でこういったことを申し合わせしていただいたことを大変心強く思う次第であります。

何より重要なのは透明性、そして公正性の確保であります。ガバナンスをしっかりやっていると、このことをこれから具体的な形にして、皆様方の御理解が進むことを、このことをしっかりやっていただきたい。これを一言申し上げます。以上です。

岩田会長

ありがとうございます。それでは、室伏顧問どうぞ

室伏顧問

皆さん、おはようございます。スポーツ庁の室伏です。

ただいま山下会長代行、秋元会長代行からお話ございましたけれども、今回JOC及び札幌市において今後の大会運営のあり方について関係者と議論をし、透明性、公正性を確保していくための改革に取り組まれると表明されたことは大変重要なことかと思えます。

報道されている東京大会の事案につきましては、現在捜査の途上

にあり、関係者が捜査に協力し、事実関係が明らかになるものと考えておりますが、仮に事実であるとすれば、フェア、公平さが求められるスポーツの世界では決して看過できるものではありません。

スポーツ庁としましてはJOC、札幌市の取り組みを踏まえつつ、連携協力を図ってまいりたいと思います。

岩田会長
荒井委員

ありがとうございます。その他ご発言、はい荒井委員どうぞ。

荒井でございます。

今日は国会議員としてというよりは、一札幌市民もしくは北海道民として一言申し上げたいというふうに思いまして、参加しております。

今日はポロシャツを着てまいりましたが、これは実は札幌市直営の円山動物園の70周年の時にみんなで作ったポロシャツです。

札幌市の円山動物園では、予算が少ない中で70周年にスタッフの皆さんのウェアを新しく更新したいんだということを当時の園長がいろんな人に話していた中、若手の経済人が中心になりまして、「それでは、みんなでお金を集めてスタッフが着るシャツを作ってプレゼントしよう」そんな試みを2年前に行いました。

僕も当時は高校の校長として20万円というわずかですが、みんなを出して、背中には他のスポンサーのマークも入ったりしています。

札幌や北海道の多くの皆さんは、本気で挑戦するそういった姿勢に対しては、自分たちで手弁当も含めて、一生懸命応援したい、そういう思いを持って生活をし、営んでいるというふうに思います。

今回のような東京2020のオリンピックというところで、パラリンピックも含まれるのかもしれませんが、こういった不祥事が起きていることは、一人一人が心を痛めながら、そういうことがないものを我々は2030年に、そして今回の円山動物園をみんなで応援したようなことをやりたいと思って、今回みんなで招致に取り組もうと思っているということは、特に2020オリンピックに関わってきた皆さんには、今日もこの会場には札幌の皆さんも含め、東京からお越し

の皆さんも多いと思いますが、そういった札幌市民、道民の気持ちを是非ご理解いただきたいというふうに思って、再発防止策は今後という話かもしれませんが、今回の3点も含めて、札幌の新しくやるオリンピック・パラリンピックがどのようにこの時代に即したやり方をするのかということは、大変大きなテーマであるということを重ねてご理解いただいた上で、招致に勤しんでいく。そういう場でありたいというふうに思っていますので、是非どうぞよろしくお願いいたします。 以上です。

岩田会長

はい、ありがとうございます。

その他、何かございますでしょうか。

無いようでございますので、それでは本件につきましては、この辺で終了させていただきますが、プロモーション委員会といたしましても、本件をしっかりと受け止め、皆様のご理解をいただきながら引き続きクリーンな招致活動に取り組んでまいりますので、よろしく願いをいたします。

それでは、改めて議事に入らせていただきますが、橋本特別顧問にもオンラインで参加をいただいておりますので、ここで一言ご挨拶をいただければというふうに思います。

よろしく願いいたします。

橋本特別顧問

はい、おはようございます。 東京から失礼をいたします。

プロモーション委員会の皆様方には、日頃から大変な温かいご支援ご指導いただいておりますこと、改めて感謝を申し上げます。

今も様々のご発言をいただきましたけれども、元組織委員会の会長という立場で、このたびのこの問題に対して、心からお詫びを申し上げたいと思います。2030のこの活動に対して、多大なご迷惑をおかけしておりますことを、改めてお詫びを申し上げます。

今回、6月30日をもって、組織委員会は解散をしておりますけれども、様々な問題に対応するために、清算人を残して今対応に努めているところであります。

当局の捜査に対しまして、全面的に協力体制をとって説明をして

いかなければいけないというふうに思っております。

そういったことが、これから2030に向かっていく大きな力になっていくんだというふうに思っております。

東京大会は、皆様方の大変な温かいご理解とご協力のもとで国内外からも「コロナ禍中においてもよくやった」という評価をいただいたと思っております。

大変良かったこともありますし、課題もありました。そういったことをしっかりと継承して、2030がこれからの日本、そしてまた北海道の未来において何を発信することができるのかということは今一度考えていただいて、しっかりとしたものを創り上げていきたいというふうに思っておりますので、これからもぜひご指導賜りますようお願いを申し上げます。ありがとうございました。

岩田会長

はい、ありがとうございました。

2. 次第2：開催意義（SDGs、経済・まちづくり）と取りまとめ素案について

岩田会長

それでは議事ではありますが、初めに次第2の開催意義と取りまとめ素案についてでございます。

まず、事務局から説明願います。

事務局

はい、それでは、事務局より報告させていただきます。

（梅田スポーツ局長）

画面表示のほか、お手元にあるいはメールにてパワーポイントの資料もお配りしておりますのでご確認ください。

はじめに、前回第3回会議の振り返りについてです。

前回、レガシーをテーマに、皆様からいただいたご意見を内容に応じて、分類整理したものをお示ししてございます。

「過去大会から学ぶレガシー」、「まちづくりのレガシー」、「次世代の人々に向けたレガシー」、「レガシー構築の視点、プロセスと発信の仕方」の4項目にまとめてございます。

次に、「大会開催意義のとりまとめ素案」についてご説明いたします。今回、別冊として事前に送付させていただいておりますが、この度、第1回から第3回会議までの皆様のご意見を整理して、「大会

開催意義のとりまとめ素案」というものを作成いたしました。

最終的には、本日いただいた意見も反映させて、次の会議で完成を目指してございます。本日はあくまでも素案となりますので、後ほどご意見やお気付きの点などがありましたら、事務局までご連絡をいただければと思います。

次に、本日の開催意義のテーマに関して「大会概要案」と「SDGs・経済まちづくり」との関連について、ご説明をさせていただきます。

昨年 11 月に策定いたしました大会概要案に記載いたしました大会によってもたらされるレガシーの中で、SDGs との関連で「環境」分野についてご紹介いたします。

札幌市の特徴といたしまして、家庭における一人当たりの CO2 排出量が多い傾向にあります。また、ターゲット、目指すまちの姿として、「次世代が豊かな自然を享受できるまち」としてございます。

次に、レガシーの一例でございますけども、再生可能エネルギー利用の社会実験を実施し、積雪寒冷地における新たな環境技術を積極的に導入することや、多くの人々の参加を受けて緑を育む活動を行うなどを目指してございます。そして、目標の例といたしまして、札幌市全体で 2030 年までに温室効果ガス排出量を 2016 年比 55% 削減、2050 年度までに実質ゼロとしてございます。

次に、「経済・まちづくり」についてでございます。札幌市の特徴といたしまして、雪まつり期間以外の冬期は、観光閑散期でございます。また、超高齢社会に適した交通体系の構築が必要でございます。また、ターゲット、目指すまちの姿として、「世界に躍進する魅力あふれるまちづくり」としてございます。

次に、レガシーの一例でございますが、大都市スノーリゾートとしてのブランドを確立し、国内外から観光客を呼び込むことや ICT 等を活用した技術提案を取り入れ、新たな交通体系の実現を目指してまいります。また、ターゲット、目指すまちの姿として、2022 年度年間外国人宿泊者数 350 万人としてございます。

次に、大会開催による経済効果についてご説明いたします。経済

波及効果は、直接的な効果だけでも 7,500 億円で、そのうち札幌市内分は約 3,500 億円と見込まれてございます。このほか、冬季の観光客の継続的な増加など、更なる効果も見込まれてございます。

事務局からの説明は、以上でございます。

岩田会長

はい、ありがとうございました。

それでは、次第2に関しまして基調発言をいただきたいと思えます。

今回のテーマの一つであります、SDGs、特に環境をテーマに「気候アクションのためのスポーツ」と題して、一般社団法人SDGs in Sports 代表の井本委員からお話をお願いをいたします。

井本委員

聞こえますか？

岩田会長

はい、よろしく申し上げます。

井本委員

皆様、おはようございます、プロモーション委員の井本です。

このたびは貴重な機会をいただきまして、深く御礼を申し上げます。

本日は、環境というテーマでの基調発言を仰せつかったのですが、主に気候変動に特化したお話を今からさせていただきたいと思えます。

まず簡単に私の自己紹介から進めさせていただきます。私は主に 10 代から 20 代前半まで、競泳日本代表として国際大会に出場しておりました。1996 年のアトランタオリンピックでは、リレーで 4 位に入賞しました。

そして、2000 年に競技を引退してから、今まで 20 年ほどになりますが、国際協力機構 JICA や国連児童基金ユニセフに関わりながら、今まで 9 つほどの発展途上国で平和構築また教育支援に携わってきました。

何故、私がそれほど競技生活とは一見全然違うような分野に関わることになったかと申しますと、14 歳の頃から国際大会に出場しておりまして、その際にすごく世界の不平等を目の当たりにしました。

自分たちのように先進国から来て最先端のウェアや水着をまっ

て、指導者から、栄養から、施設から、本当に全て揃っている環境で競技をしている私たちの隣で、ウェアもなく、ゴーグルもなく満足に食べられないような国から来ているような選手たちがいた時に、何故こんなに自分は恵まれているのかなということのを思いはじめ、そうした体験を毎年させていただいているうちに、自分が将来こういった恵まれない国の方々のために働きたいと思い、国連で働くことを志しました。

そういった経緯があって、今までオリンピックや競技スポーツとは離れた生活をしていたんですけれども、2000年にユニセフのギリシャ事務所で難民支援をしていた時に、聖火の引継ぎ式で、突然コロナ禍で来られなくなった日本代表団の代役を24時間前に仰せつかりまして、そして再びオリンピックに携わらせていただくことになりました。

その後、ユニセフを休職して昨年日本に帰ってきてからは、東京2020大会のジェンダー平等推進チームのアドバイザーに就任させていただき、そして短い期間ではありましたが、大会におけるジェンダー平等の取り組みの強化に携わることになりました。

また昨年、スポーツ仲間と一緒に一般社団法人を立ち上げまして、主にジェンダー平等と気候変動分野で、アスリートやスポーツ関係者の方々とともに、専門家からの知識を得ながら本質について学び、そして発言力やリーダーシップを強化していく、そういったような活動を行っています。

特に、環境や気候変動分野では、興味を持っている若いアスリートの方々と一緒に学びながら発言力を高め、そして自分の周りにいるファンの方々やスポーツ仲間に対して、意識改革や行動変容を促せるようなそういった活動を今行っているところです。

ここから、本題に入らせていただきます。

まず今、地球上で最もと言っても過言でないほど、私たちの世界を脅かしている事態の一つである気候変動について、簡単にリマインドをさせていただきます。

この夏の世界各地の猛暑は、気候変動が本当に取り返しのつかないところまで来ているということを私たちに突きつけたと思います。

ヨーロッパでは、各地で山火事が深刻化していましたし、多くの自然やインフラが消滅しました。そして、山火事によるスポーツ大会への影響も、例えば2年前のテニスの全豪オープンでも記憶に新しく残っているかと思います。

日本でも水害が本当に頻発しておりますし、まさに今もまだ起こっているパキスタンの豪雨による洪水では、国土の3分の1が冠水している状態で、すでに1,300以上もの人が亡くなっています。気候変動による雪の減少も非常に深刻で、今年の北京オリンピック・パラリンピックでは、人工雪による大会開催が大きな話題となりました。

私もこういうふうに参加している中で、日々自然環境に頼って競技をしているウィンタースポーツの方々、アウトドアスポーツの方々の地球温暖化や気候変動に関する問題意識が非常に高いということを感じています。

また、このプロモーション委員会でも、何度かメンションがあったかと思いますが、今年初めにカナダのウォータールー大学が発表した研究では、温室効果ガスの減少が今のまま維持されていくと、2080年にオリンピック・パラリンピック冬季大会が開催できる都市は、今までの開催都市で見ると札幌だけということが研究で示されています。

(通信不具合により音声切断)

井本委員

大変失礼しました。

はい、カナダのウォータールー大学の発表です。

2080年にこのまま温室効果ガスの減少が続いていけば、2080年の頃にオリンピックが開催できるのは、札幌だけになるという試算がなされています。

そのくらい冬季大会の開催、ウィンタースポーツの存続が危ぶま

れている状況が間近に迫っております。

その原因となる CO2 ですけれども、温室効果ガスの排出が非常に高まっています、もう既に人類の限界と言われる 350PPM を既に超えて、そして悪化をし続けている、そのスピードが年々速くなっているということが研究によって示されています。

こういった地球の温度が年々上がっている中で、世界では産業革命前からの世界の平均の気温の上昇を 1.5 度以内に抑えるという目標がパリ協定で定められ、そして世界全体の目標となり、SDGs の根核となっております。

SDGs とスポーツの関係についてお話させていただきますと、SDGs を定めている 2020 アジェンダという文書がありますけれども、この中でもスポーツによる SDGs への貢献、その力というものが明記されています。ここでは具体的に読み上げることは割愛させていただきます。

次に、世界で、気候変動、脱炭素化に向けた動きがどうなっているかということをお簡単にざっと進めさせていただきます。

一番大きなものとしては、国連組織の中に、国連気候変動枠組み UNFCCC (トリプル C) という機関がありまして、そこが IOC と連携をして Sports for climate action という政策を発表しています。

これについて、少し簡単にお話をさせていただきますと、この Sports for climate action では、より具体的でより組織的な取り組みを世界が行うことを明記されており、これに賛同する団体は現在 8,000 以上になりますけれども、こういった団体が署名を行う条件として、ここに書かれている原則に賛同することが、署名の条件となっています。

昨年、COP26 では” Race To Zero” を発表して、さらにこの温室効果ガスをスポーツの団体が排出する中身を全部測って、どのぐらい 1 年間に温室効果ガスを排出しているかを測った上で、それを 2030 年までに半減する。そして、2040 年までにこの排出量をゼロにするということを署名の条件というか、これに賛同して努力をしま

すということを誓うということが条件となっています。世界全体でもこういった大きな枠組みができつつあると思います。

IOC の方でも、サステナビリティ戦略ということで、主にインフラ、競技場の建設などの使用のための CO2 の削減、そして、調達のプロセスにおいても、グッズの製造や販売そういった全ての調達のプロセスで CO2 を下げていくこと。

それから、交通、人々の移動それは連盟やチームの移動に関しても、できるだけ温室効果ガスを下げるために制限をしていく、また、観客の移動に関しても、飛行機や車での排出をできるだけ減らして、できるだけ公共交通機関を使うこと、または徒歩でスポーツ観戦に行くこと、そういったことを推奨するような対策が述べられています。

そして、人員、教育だったりとか、そういった不正のない仕事環境であったり、そして一番最後に気候変動対策としてこういった対策をしなければならないのかというものを IOC のサステナビリティ戦略として定められています。

本当にたくさんの活動が世界中で行われていて、リーグでも FIFA や UEFA やメジャーリーグ、本当に今、まさに世界中のスポーツ団体が脱炭素化に向けて、すごく大きな力で動き出しているなというものをすごく感じています。

日本での取組みについて、私がとても良いなと思っていること、そしてそれがすごく札幌オリンピック・パラリンピックの招致が成功した場合も、こういった活動が参考になるなと思うものを簡単に紹介させていただきます。

PROTECT OUR WINTERS という NGO 団体が日本にもありまして、これは国際的にアメリカで立ち上がった団体の日本支部ですけれども、この団体が長野県の白馬村に設立されまして、その設立と同時に市民社会やスキー場、またそこにあるたくさんの企業と一緒に大きな力を持って行政を動かして、さらにシンポジウムもたくさん開催したり、気候非常事態宣言に至るまで、本当に大きな力が、実は

ウィンタースポーツやスキー場、スポーツをベースにしている産業
また市民社会から沸き起こった、というものすごく画期的な例が、
白馬村に誕生していると思います。

この活動は今、北海道のニセコでも非常に活発になり始めている
とお聞きしていますので、こういったようなスノーコミュニティー
が中心となった動きというのは、今回のオリパラの招致かつ、招致
された場合の準備段階でも、参考になるのかなと思っています。

最後に、これから招致・開催に向けてできることということで、
私から少し提言させていただきたいと思います。

前回の基調発言の慶応大学の学生さんからの発言にあったところ
の文章が、私はすごく心に残っておりまして、どうやってスポーツ
とオリンピック・パラリンピックをつなげるかというところに、市
民一人一人が、アスリートたちが挑戦をしているように、自分たち
の使命を見つけて、そして挑戦する。そういったアスリートたちと
一緒に自分たちも挑戦するんだという、そして世界に貢献するんだ
という実感が持てるような、そういう大会になるべきではないかと
思っています。

よって、オリンピック・パラリンピックの開催を、スポーツを見
るというだけではなくて、そこに向かって気候変動という共通の目
標に対するチームを結成して、そこにレースをする競争するような
感じで、一人一人が関わっていけるような、そういった仕組みがで
きるのではないかなと思っています。

具体的には、3つの活動・枠組みが上げられると思います。

一つは、先程の白馬村の例にもあったようなまちづくりというこ
とで、市民社会と、そして冬の伝統の産業スポーツ産業、そういつ
たところに関わる企業やコミュニティの皆さんが一緒になって行政
を巻き込んで、まちを作っていく、意識を向上させていく、そういつ
たことが望ましいのではないかなと思っています。

そして、スポーツ界としましても、やはりオリンピック・パラリ
ンピックを招致するんだということで、どんどん GHG（温室効果ガ

ス) を測定して、そして、組織的に削減をしていく Sports for climate action に賛同して世界と一緒にこの気候変動対策に関わっていくという意思表示が大事ではないかなと思いますし、アスリート達が一緒にその行動に賛同して、たくさんの人たちを巻き込んで意識改革を促していくことができるのではないかなと思います。

そして、大会開催を迎え、そこではもはやゼロカーボンというのは、オリンピック・パラリンピックでは通念になりつつあると思いますので、それをいかに、今パリ大会が目指しているようなカーボンをマイナスからゼロにするだけではなく、プラスにしていくような、そしてもう 2030 年ですから、新しい次の SDGs を見据えた、新しい形を提示していけるような、そういった大会を目指していくべきではないかなと思います。

こういった取り組みをすべて総合して、全体的に北海道全体、そして日本全体を巻き込んで、気候変動というものを前に進めていけるような、そういった大会に札幌大会がなればいいなと私は思っております。

長くなりましたけれども、私の言葉、基調発言は、以上になります。ありがとうございました。

岩田会長

井本委員、ありがとうございました。

それでは、意見交換に先立ちまして、芦立委員より「スポーツを通じたSDGsマネジメント手法に関するガイドブック」についてご紹介がありますので、お願いをいたします。

芦立委員

はい、ありがとうございます。

日本スポーツ振興センターの芦立でございます。

今回ご紹介したいと思いますのは、私どもが 8 月に完成させました「スポーツを通じた SDGs マネジメント手法に対するガイドブック」、これを具体的に大会に適用できないかというご提案でございます。

ガイドブックは、英語版と日本語を作成しておりますが、プロジェクト実施体制というところでございますが、私ども JSC と Swiss

Academy for Development による共同開発ということでございます。

専門的知識の協力を仰ぎまして、メンバーに入っていただきましたのがユネスコ、IOC、それから国際パラリンピック委員会 IPC のディベロップメント部門であるアギトス財団、それからローレウス・スポーツ・フォー・グッド財団に加えまして、イギリス連邦 52 カ国で構成されますコモンウェルスの事務局にも入っていただきまして、これを作成したというものでございます。

ポイントとして、かいつまんで申しますと、スポーツと SDGs、井本委員のご意見にもございましたし、前回の慶応の学生の皆さん方のご発言にもありましたように、大変大事なことになっているわけでありまして、具体的にそれをどう適用していくかというところが一つのネックになっているということが、私どもの認識でございました。

認識している国際的な政策計画の枠組みというところをご覧いただきますと、実は 2015 年に国連持続可能な開発サミットで制定された 17 の SDGs の目標ということについては、多くの方がご存知ですが、それを具体的に進めていくためにどうなっているのかと申しますと、例えば、スポーツに関して言いますと、第 6 回のスポーツ大臣会合で採択された火山行動計画というのが一つございます。

そのほかに、体の問題、スポーツと健康の問題に関しましては、WHO が身体活動に関する国際行動計画というのを作っております。

その他、国連では、開発と平和のためのスポーツに関する行動計画というのを設けておりまして、17 の目標の下に様々な機関がそれぞれの専門的立場から様々な目標を掲げているわけです。

これを全部クリアしていくということがこれからの大会にはものすごく大事なのですが、それを全て読み込んで一個一個チェックをしていくというのは、非常に大変なことだということもありまして、私どもが関係機関の協力を得まして、第 6 回スポーツ・体育大臣等国際会議の要請を受けてガイドブックを作ってきたというものでございます。

このガイドブックにつきましては、8月22日に世界でオープンにいたしました。その際にコモンウェルス事務局（英連邦52カ国のプロジェクトマネジャー）から、コモンウェルスゲームズ等の大会主催者や関係者にとって有意義な取り組みだと、環境の持続可能性やジェンダーの主流化（あらゆる場所でジェンダー問題をきっちりと取り上げていく）、あるいは障がいのある方のインクルージョンなど、いろんなテーマで活用できて、これをチェックリストとして使っていくべきではないか、というお話をいただいたところでございます。

最後でございます。細かい事で恐縮でございますが、具体的には、それぞれのテーマごとにチェックしなければいけないところ、チャートというところを全て具体的に書き込んでございます。

したがって、うまくいったのかいかないのか、というところについて、このチェックリストを当てはめることで、自然と大会そのものが国連やWHOやスポーツ大臣会合で言われている課題をクリアしているかどうかを説明していくことができる、ということになりますので、ぜひ今回の札幌の招致計画も、現在私どもが拝見している限りでは、このチェックリストを十分クリアできるような内容が非常に多くなっていると思いますので、このチェックリストをお示ししていくことで、世界的に見ても札幌大会がSDGsをクリアしたしっかりした大会になるということの説明が、非常に容易になるのではないかなと思っているところでございます。

陥りやすい落とし穴などについても言及しております。

例えば、成功する可能性の高い個人または集団を選んで、この計画を立てたくなるのではないかと、あるいはサービスに対する利用者参加者の満足度・アウトプットが高ければ、プログラムの効果・アウトカムが高いというような判断をしてしまうけれども、プログラムの効果の高さというのはまた別の視点でやっていく必要があるのではないかと。

具体的にはどういうふうにチェックしていくかは、右のチャート

のところ、順番に見ていただければ半ば自動的にチェックが効くというようなものでございます。

是非これをご活用いただけると、スピーディーにしかもグローバルな視点で大会の計画がうまく進んでいるんだということをお示しできるのかなと思ひまして、ご提案させていただいた次第でございます。以上でございます。

岩田会長

芦立委員、ありがとうございました。

それでは、意見交換に入りたいと思います。

今回のテーマは、「SDGs」と基調発言はございませんけれども「経済・まちづくり」の2つでございます。全体の時間の関係上、取りまとめ素案に対する意見も含めまして、ここでの意見交換は30分とさせていただきます。簡潔なご発言をお願いいたします。

それでは、会場にいる皆様でご発言のある方はいらっしゃいますでしょうか。 はい。狩野委員どうぞ。

狩野委員

よろしく申し上げます、狩野です。

僕が現役中に、実際に見てきた現状をお伝えできたらなと思ったのですが、2010年頃から毎年通っていたスキー場、そこはヨーロッパの氷河のスキー場だったのですが、コース脇にあった5メートル近い氷河が、3、4年後にはもう融けて全てなくなってしまうような現状があったり、コースも実際に氷河の上を滑るようなスキー場だったので、コースの氷河が抜けて落ちて崖になってしまって、リフトすら使えないというような状態に、本当に5年10年で大きく様変わりしてきたのを目の当たりにしてきました。

もちろんいろんな方法があって、このゼロカーボンを実現すると思うんですけども、スポーツの舞台でできること、社会的に影響を及ぼすことができるのであれば、このオリパラを使ってしっかりと札幌・北海道からゼロカーボン社会をつくることができれば、すごくうれしいなと思ったので、改めてこの課題については積極的にやっていきたいなと僕自身も思ったし、より具体的な案を検討していきたいなと考えました。 ありがとうございます。

岩田会長

ありがとうございます。

他にご発言の方は、いらっしゃいませんか？

はい、山下会長代行どうぞ。

山下会長代行

井本委員、基調発言どうもありがとうございました。

私自身は、前々からこの気候変動、地球温暖化、環境破壊に関しては関心を持っております。やはり我々スポーツに関わる人たちがこの問題に対する認識をしっかりとって、この行動を変えていく、これが社会に与える影響はかなりあると思っています。

ただ、簡単ではないのは、私から見ると、便利快適さを求めることをやめなきゃいけないと思っています。そこの覚悟があるかどうか。

それから、ちょっと極端な話をしますと、最近の状況を見てみますと、これから、どれぐらい人類が地球上に生存していけるのかなと、もう一つ言いますと、我々大人の役割というのは、次の世代に何を残していくか。

そう考えた時に、スポーツに関わる多くの方々、これはやる人だけじゃない。見る人、支える人も含めて、そういうスポーツ界がそれに対して行動を起こしていく、これは便利快適を求めることをやめるという行動を変えることは簡単ではないけれども、そこに対してポジティブなインパクトを与えることになると思っています。

JOC も昨年、JOC ビジョン 2064 というのを作りまして、3つの柱がございますけれど、その一つがスポーツを通して社会課題の解決に貢献。これを柱に掲げている以上は、そこに対してはしっかり責任を持って取り組んでいく。

やはり、いろいろな関係団体が、そういう意識を持って多くの人を巻き込んで、そして2030札幌招致、この開催が決まった時には覚悟を持って取り組んでいく、その姿勢を示すことは絶対必要ではないかなと思っています。以上です。

岩田会長

はい、ありがとうございます。

その他、はい、河合委員どうぞ。

河合委員

はい、ありがとうございます。

私の方から、まず芦立委員からご紹介いただいたガイドブックは、非常に国際的な様々な機関からも確認をいただきながら作成されているという意味からも、非常に可能性が高い、こういったものを適用していくとご理解をいただくにも有効なツールになり得るのではないかと、ちょっと詳細まだ私も全部読んだわけではないですけども、非常に可能性を感じたということ、まず1点をお伝えしたいと思います。

本日、基調発言いただいた井本委員からもありましたように、この気候変動や環境問題、先般も我々、私も発言させていただいた共生社会を含めて、この問題意識を持っている、認識をしているというのは多いのですが、具体的なアクションに、一人一人の、我々委員もそうでしょうし、市民とか道民、国民の皆さんにそれをしてもらえるようにしていく、ということに課題もあるでしょうし、更にはそれを日常化していくということによって、達成し得る目標かなと思いますので、この辺の具体策を我々も検討し、また提案をしていくということが求められていると思います。

最後に、先般、共生社会バリアフリーシンポジウムというところに登壇させていただきました。

共生社会ホストタウンというものに、東京2020の事前合宿等々を受け入れた、特にパラリンピックの競技を受け入れた自治体等が参画している会です。

こちらでお話をした際に、バリアフリーの旅館などの補助金、そういう施設を改修する事に対して、当初は15年20年前に提案をしたところ、なかなか手も挙げなかった。

ある旅館が1箇所手を挙げてやったところ、お客さんがそのときは30倍増えたというような話がありました。

それまでは、1年とか、10年20年の間に一人二人しか車椅子の方が泊まらないというような状況だから必要ないだろう改修は、という声がある中、それを取り組んだことで、実は来たかった人とか、

そういう方々を取り込むことにつながり、本当の潜在的なニーズをちゃんと確認できたという事例を紹介いただきました。

冬のなかなか雪まつり以外の時期に、札幌市のなかなか来客がという話がありましたが、冬でもそういう風を楽しみたいという方々も、実は潜在的にいらっしゃる時に、様々なまちづくりの視点で、バリアフリーとかアクセシビリティというものを共に高める、車椅子の方や視覚障がいの方や高齢者の方々や、ということを含め今後提案できるような取り組みや計画を検討していけると良いなと感じました。以上です。

岩田会長

ありがとうございます。その他、ご発言ございませんでしょうか。
はい、荒井委員どうぞ。

荒井委員

荒井でございます。井本さん、ありがとうございました。

大変勉強になりましたし、最近のこのニュースで心を痛めている者として、本当にこの状況をどう変えていくのかというのが大変大切だというふうに思っておりましたので、この場で議論できることは大変嬉しく思っています。

実は昨日、河合さんに札幌市内の澄川南小学校で、I'm Possible 共生社会の授業をしていただきまして、僕も一緒に伺いましたけども、小学校4年生3年生と5年生の生徒全員が、河合さんの1時限の授業でものすごく目が輝きたくさんの手を挙げて質問をし、石橋校長先生やいらっしゃった先生たちが、あの生徒があんなに手を挙げるとはと思うぐらいすごく子供たちに対して大変なインパクトがあったと思います。

僕もそれを見ていて思ったのは、スポーツ選手が持っている発信力や頑張りきっているその姿が、若い人たちにもものすごく大きな影響を与えるのだということを感じたばかりでした。

今の狩野選手からも、氷河が融けている様であったり、僕らが普通に札幌で生活していてもなかなか見えてこなかった世界観を、スポーツ選手の皆さんは見てきていて、それを発信される、それを特に若い人が受け止めるということを含め、ぜひオリパラ招致の後この 8

年間、札幌や北海道で、そういう授業やそういう展開を、特にスポーツ選手の皆さんが、もしくはアスリートや卒業生の皆さんがしていただけると、大きな行動変容に繋がっていくと改めて思いましたので、そういう機会を共生社会、SDGsを含めて進めていく、そういうふうな会でありたいなと思っています。 以上です。

岩田会長

ありがとうございます。

それでは、伊達委員、どうぞお願いいたします。

伊達委員

はい、ありがとうございます。

(オンライン)

本日のお話し聞いて、スポーツの活動と気候変動というテーマが、非常に密接であるということが井本さんの話でよく分かりました。

特に、冬のスポーツは、温暖化の影響もあるということで、2080年、札幌だけが開催できる場所だということも、なかなかセンセーショナルなことだと思って聞いていました。

そういう意味で、今回、スポーツを通じてオリンピックを通じて誘致し開催すると同時に、気候変動に対する取り組み宣言にもつなげていくことによって、メッセージ性につながっていくと考えました。

また、途中のパワーポイントの資料の中で、国内のSDGsに対する認識が海外との落差がある、ということが書いてありました。

オリンピックを誘致して、その活動及び誘致が成功した場合の開催までのプロセスの中で、環境変動に対する取り組みにフォーカスをあて、世界の中での日本、北海道、札幌の今の意識、現地の理解し、その上で、どう変えていくのか、そのプロセス・プログラムを組むことで表現し続けることで世界にアピールできると感じます。

その活動自体が自分事につながっていく、我々が求めている札幌市内の人たちが、このオリンピックを通じて自分事として何をしていくのかということに、まさにつながっていくだろうと感じました。以上です。

岩田会長

ありがとうございます。 菅谷委員、お願いいたします。

菅谷委員

はい、ありがとうございます。

(オンライン)

本日は、基調講演もいただきましてありがとうございます。

このゼロカーボンということで、ウィンタースポーツであるオリンピック・パラリンピックは特に自然と共に成功していく事業であるんだなということを改めて実感して、自分自身としてもここに真剣に取り組んでいかなければならないということを勉強させていただきました。

また、チェックリストにつきましても、一人一人が自分事として行動できる指標になるのではないかとことを思いまして、こういうことがありますと、自分事として進めていくことができるのではないかと思いました。

今回、私の方からは少し、まちづくりという観点からお話をさせていただきたいと思えますけれども、この大会をきっかけとして、SDGsの推進、社会問題の解決に向けた活動が加速して行くということは、経済発展やより暮らしやすいまちづくりが一段と進むことに期待をしています。

先日、当社では札幌市とANAとともに札幌大会の招致を契機とした共生社会の実現に向けて、ユニバーサルマースの共同プロジェクトを開始させていただきました。

9月4日には、車いすの街歩きイベントとし「WheeLog! in 札幌」というのを開催しまして、実際に車椅子に乗って街にあるバリアーの現状やバリアフリーをチェックさせていただきました。

委員である牧野委員様とか、永瀬委員様にもご参加いただいて多数の方に貴重なご意見をいただきましたので、こういうところを改善につなげていただけたら、というふうに思っています。

このような取り組みが、まさにオリンピック・パラリンピック大会を契機として、将来を見据えたまちづくりにつながるイベントになるのではないかと思いました。

そして、世界の先端に行くということをお見せすることで、オリンピックの招致、機運醸成にもつながるのではないかと考えており

ますので、引き続きこのような取り組みを強めていきたいと思えます。

また、経済界では、経団連が近々札幌市を訪問し、実際に前回の冬季大会の関連施設等を視察することを検討しているというふうにも聞いています。企業や業種等の垣根を越えた連携、機運醸成を努めて参ることも大切なことだというふうに思っております。

以上でございます。

岩田会長

ありがとうございます。他に発言の方はいませんか。

はい、牧野委員どうぞ。

牧野委員

はい、牧野でございます。

手短にお話しさせていただきたいと思えます。

今日、井本委員の基調講演、私もとても心に響くことがありまして、自分自身、スポーツとSDGsの関係というのがいまいちよく分かっていないところがあったのですが、今日お話を聞きまして、密接な関係があるということが胸の中にストーンと落ちました。ありがとうございます。

それと、SDGsの17の目標というのは、全部のことにつながっているのだと実感しまして、まちづくりやオリンピックと全部密接な関わりがあって、社会の問題を一つ一つ解決していくことが、SDGsにもつながっていると感じました。

芦立委員からの資料も拝見させていただきましたけれども、とてもこれは貴重なものだとということを実感しまして、是非これを活用していろいろなことにつなげていければいい、そんなふうに感じました。

それと、ANAあきんどさんの、この前の街歩きに、私も参加させていただいたのですけれども、一緒にいたメンバーの中に初めて車いすに乗ったという大学生がいました。専攻を聞いたら、福祉の方とかそういうのではなくて、IT関係の技術を学んでいる学生だったので、一つ一つに関心を持ってくださって、初めて知ったことがたくさんあったと感想をくれました。

知らないことが無理解につながっていると、毎回こんなことを言っているのですが、ぜひ知っていただく機会、このオリンピック誘致、開催、それを通して知っていただくということを、市民の皆さんにぜひぜひ進めていただきたいと感じました。

最後に、井本さんのお話の中に、「市民一人一人が自らの使命を見つけ挑戦する力をアスリートの挑戦を通じてエンパワーし、自分が世界に貢献できる、実感が持てる大会」、この言葉がすごく印象的で自分一人一人の意識というのがすごく大切だということも感じました。ありがとうございます。

岩田会長

ありがとうございました。その他ご発言ございませんでしょうか。それでは、役員の皆さんでご発言はございますでしょうか。

はい、森副会長お願いいたします。

森副会長

井本さん、ありがとうございました。

今日は、スポーツとSDGs、気候変動、こういうことの関わりをご説明いただいたんですけども、今まで共生社会あるいはレガシーということテーマにして議論をしてきた中で、これは全て社会の課題に対する解決策の議論だなということ、当然そういうことなんですけれども、いろいろな方がお話しされたように、社会の課題を解決するということは、一人だけではできないわけで、多くの方々がそこに自分の意思を持って参加することが一番効果的だということで、そういうその場所とか機会をいかに提供していくかということが、我々が議論している、議論の先にあるものなんだということを感じました。

今もお話があったんですけども、そのためには一人一人の市民が参加しやすいような建付けを準備するということで、これからの社会を担う子供たちも重要なターゲットとして認識しながら、そういう準備をしていく。

我々が目指す、2030年というのは幸か不幸か8年先であります。

この期間をもしこういった社会解決のテーマに、スポーツの軸を置きながら時間を使うことができれば、これはすばらしい8年間に

なる可能性がある。ただ、現実ではこれは可能性だけですので、まずは招致プロモーションを成功させて、そういった8年間を得られれば、皆さんがいろいろ議論してくださっているような、いろんな社会解決のテーマを切り口にして、この問題を北海道・札幌が先行して取り組んでいけることができれば、本当にスポーツの価値というものを改めて感じるができるなということを改めて感じました。

以上です。

岩田会長

ありがとうございました。その他ございませんでしょうか。

はい、皆様大変ありがとうございました。

今回の会議で開催意義に関する主要テーマは、一旦全て議論されたものと考えております。

本日、取りまとめ案の素案をお配りしておりますけれども、本日の議論を追加する形で整理していきたいと思っております。

また、本日いただきましたご発言は、事務局で整理をいたしまして、次回の会議で共有させていただきますので、よろしくお願いをいたします。

それでは、この議題については、終了させていただきます。

3. 次第3：機運醸成とメッセージ・スローガンの策定

岩田会長

次の議事に移ります。次第の3「機運醸成とメッセージ・スローガンの策定」であります。

まず、機運醸成の取組について、事務局から説明願います。

事務局

それでは事務局より説明いたします。

(梅田スポーツ局長)

右下に番号11と書かれたスライドをご覧ください。

まず、各種イベント等の機運醸成活動をご紹介させていただきます。

7月に開催いたしました招致期成会の「総決起集会」では、アスリート、プロスポーツチーム、市民団体、経済界等による招致応援

宣言など、地元が一致団結して招致を進める意気込みを示しました。

この他、環境広場さっぽろ 2022、大ほっかいどう祭といった大規模イベントでの PR を行いました。

また、次のスライドですが、札幌市制 100 周年記念式典やサマージャンプ大会、また、次のスライドですけれども、東京 2020 パラリンピック 1 周年記念イベント、さらに、北海道マラソン、また次のスライドですけれども、モエレ沼芸術花火といった各種イベントでの PR を実施したところでございます。

また、本日この後、東京で開催する「サッポロスマイルデー」を始め、明日から始まる「さっぽろオータムフェスト」と連携した PR など、ご覧のとおり、今後も大規模な集客イベント等を積極的に活用しながら、市民・関係者が一丸となって、機運醸成の取り組みを進めてまいります。

次に、市内各所における都市装飾についてご説明いたします。

北京 2020 大会で活躍したアスリートの写真を活用したデザインによる装飾を、商店街や札幌ドームをはじめとしたスポーツ施設、工事の仮囲いフェンス、それから、地下歩行空間の柱巻きといった市内各所で展開をしてございます。

次に、ワークショップの開催についてでございます。

3 月の意向調査の結果も踏まえまして、開催意義や将来のまちの姿を若い世代に考えてもらうワークショップを、8 月 25 日から開始をしてございます。

今後も 10 月までに 10～15 回程度、大学や専門学校、企業などの団体を対象に実施をしてまいります。

若い世代の意見を「大会概要（案）の更新」に盛り込むことで、市民がより共感できる計画を目指してまいります。

次に、プロモーション委員会の委員によります機運醸成活動についてご紹介させていただきます。

狩野委員は、8 月 24 日に大学の附属認定こども園の園児たちとのふれあいや、学生を対象とした座談会を通じて、共生社会への理解

を深める体験型出前授業を行っていただきました。

昨日は、河合委員が小学生を対象に、国際パラリンピック委員会の公認教材『I' m POSSIBLE(アムポッシブル)』を活用しまして、特別授業を行いました。引き続き、委員の皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

最後に、「北海道・札幌 2030 オリンピック・パラリンピック招致応援大使」の追加についてでございます。

このたび新たに、太田渉子委員・岡崎委員のお二人にご就任をいただきました。大使の皆様には今後、様々な場面で機運醸成活動と一緒に取り組んでいきたいと考えておりますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

事務局からの説明は、以上でございます。

岩田会長

ありがとうございました。

ただいまの説明の中にありましたとおり、太田渉子委員と岡崎委員が新たに招致応援大使となりました。

ここで、お二人から一言抱負をいただければ幸いです。

はじめに、太田委員、お願いいたします。

太田委員

はい、ありがとうございます。太田でございます。

新たに 2030 北海道札幌応援大使を委託いただきまして、ありがとうございます。

私はスポーツを通じて、困難があっても、そのマイナスの気持ちに向き合い、乗り越える勇気を学び、またたくさんの方に応援をいただきまして、長く選手として挑戦を続けることができました。

2030 北海道・札幌のオリンピック・パラリンピックでは、たくさんの方にウィンタースポーツの楽しさ・魅力を知っていただけるように、また多様な学びの場であることを、私自身も情報発信をしていきたいと思っております。

皆様とともに、北海道・札幌の冬が楽しみになるような取り組みを行ってまいりたいと思っております。引き続きよろしくお願い申し上げます。

岩田会長

ありがとうございました。次に岡崎委員、お願いいたします。

岡崎委員

はい、皆様こんにちは、岡崎朋美です。

先ほどの基調講演、井本さん、どうもありがとうございました。本当にたくさんの情報をいただきまして、本当に勉強になりまして、これから応援大使ということで、皆様のいろんな思いを北海道全員の皆さんや国民の皆様方に、いかに身近に感じてもらえるように、また、先ほども人々の意識向上ということもありましたけれども、あまりゴリ押ししてしまうと、嫌がる方もいらっしゃると思いますので、すごくスムーズにご対応していただけるような、そんな案が、またいろいろと考えていただければ、自然と身について皆さんの行動がより良い生活になってくれるような、そんなスムーズな事案が出ればいいなというふうに思っております。

また、SNS とかでたくさんいろいろ発信させていただいているところもありますので、私なりにスポーツ全般的ですけれども、このウィンタースポーツを、もっとより身近に感じてもらえるように、あまり難しくなく、簡単に皆さんに好意的に見てもらえるように発信していきたいなふう思いますので、またいろいろとアドバイス等々あればお知らせ願いたいというふうに思いますので、頑張らせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

岩田会長

はい、ありがとうございました。お二人にはどうぞよろしく願いいたします。

次に、メッセージ・スローガンの策定について、事務局より説明をお願いいたします。

事務局

それでは、事務局より説明いたします。

(梅田スポーツ局長)

右下に番号 20 と書かれたスライドをご覧ください。

メッセージ・スローガンの策定についてご説明をいたします。

策定の趣旨といたしましては、「開催意義の取りまとめ」を踏まえまして、理解促進や機運醸成の観点から、市民・道民・国民向けにメッセージ・スローガンを策定し、当面の機運醸成への活用や、大会概要（案）への反映のほか、「狙いを定めた対話」移行後の国

内外のプロモーションに活用してまいりたいと考えてございます。

メッセージにつきましては、大会開催の方向性を短く平易な言葉でわかりやすく整理をしたものでございまして、こちらをベースとして、スローガンの策定を行います。

なお、東京 2020 大会招致では、“Discover Tomorrow” [未来（あした）をつかもう] というスローガンでございました。

次に、ワーキンググループの設置についてでございます。

限られた時間のなかで、メッセージ・スローガンの策定及び活用方策を、少人数で、集中的に検討する必要があることから、岩田会長にご相談させていただいて、ワーキンググループを設置させていただくことにいたしました。

メンバー構成は、ご覧のとおり、木村委員を座長として、大学生など外部のメンバーも参画していただくことによって、若い世代の声をしっかり反映してまいりたいと考えてございます。

次に、インターネット投票についてでございます。

多くの市民・道民・国民の参画を得ながら機運醸成を図っていくために、スローガンの策定にあたって、3 案程度を候補として「インターネット投票」を実施したいと考えてございます。

ワーキンググループでは、この投票結果を参考に、スローガンの最終案を決定してまいります。

募集期間は、9 月下旬から 10 月上旬の 2 週間程度、専用の特設サイトを開設し、投票の受付を予定してございます。

また、策定後の活用については、キービジュアルや動画、グッズ、メディア活用等による展開を検討してまいります。

次に、策定スケジュールについて、ご説明をいたします。

9 月 2 日にワーキンググループの第 1 回を行い、メッセージ・スローガンの具体例を基にした意見交換を行いました。

今後は、今月中旬から下旬にかけて、ワーキンググループを 2 回程度開催して、インターネット投票に向けたスローガンの絞り込みを行いながら、10 月中旬の会議には、投票結果を参考に、最

終案を決定してまいります。

そして、次回の10月27日の第5回プロモーション委員会において、ワーキンググループより、最終案と選定経緯を皆様にご報告の上、発表へとつなげていきたいと考えております。

事務局からの説明は、以上でございます。

岩田会長

はい、ありがとうございました。

メッセージ・スローガンの策定については、本日、皆様からのご意見を伺った上で、今後の検討につきましては、ワーキンググループに委ねることとし、次回のプロモーション委員会では、木村座長から報告をいただくことにしたいと思っておりますが、皆さん、よろしいでしょうか。

(特に異議なし)

はい、ありがとうございます。それでは、そのような進め方をさせていただきます。今後の策定につきましては、ワーキンググループに委ねることとさせていただきます。

なお、事前にリリースでご連絡をしておりましたけれども、スローガンの議論につきましては、メディア非公開にさせていただきますので、大変恐縮ですが、ここでメディアの皆様にはご退場をお願いいたします。公表できる時期がまいりましたら、議事録で公表をさせていただきます。

ご協力をよろしくお願いいたします。

※ここからメディア非公開

事務局

それでは、岩田会長、よろしくお願いいたします。

(梅田スポーツ局長)

岩田会長

はい、それでは、これ以降の進行をワーキンググループ座長であります木村委員にお願いをいたしたいと思っております。

なお、既に第1回の会議が開催されたと報告を受けておりますので、ワーキングの報告を含めてお願いいたします。

木村委員

それでは、木村委員、進行をよろしくお願いいたします。

ただいまご紹介いただきました、このたび、北海道・札幌2030オリンピック・パラリンピックプロモーション委員会、ワーキンググループの座長を務めさせていただくことになりました木村でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

先ほど、事務局よりご説明がありましたとおり、開催意義の取りまとめを踏まえ、市民・道民・全国民の方々に対し、より分かりやすく、シンプルに大会の開催意義や可能性を伝えることができるメッセージ・スローガンを創出し、インターネット投票による参画によって「自分ごと化」を促進、機運醸成に寄与することをミッションとして活動させていただくことになっております。

本日、本当に限られたお時間の中ではございますが、第1回のワーキンググループで出た意見等々を皆様にお示しさせていただいた上で、皆様のご意見をたくさんいただきまして、取りまとめに進めさせていただきたいと思っておりますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

また、ただいま事務局が配付いたしました資料でございますが、今後のメッセージ・スローガン策定に向けてのたたき台となるものでございますが、今後、商標登録などの手続きを済ませてから公表する必要がございますため、この場限りの扱いとしていただきますようお願いを申し上げます。

それでは、まず私の方から第1回ワーキンググループの内容について簡単にご説明をさせていただきたいと思っております。

第1回のワーキンググループでは、リストにございますプロモーション委員会のメンバー数名の皆様に加えまして、地域を支え、これからのまちづくりを牽引していかれる地域経済人の皆様、そして若い世代の方々、学生さんやZ世代の皆様にも多くご参加をいただきご意見をいただきました。

そこで出ました会議の主な内容は、お配りをしております第1回ワーキンググループ議事の資料の通りではございますけれども、多

くの参加されている皆様からの声、現地の札幌・道民の皆様の声としましては、まだまだスポーツやオリンピック・パラリンピックに今まであまり関わりがない、興味関心があまり持てないという方々がまだ多い、ということが意見としてたくさん出ておりました。

あと、自分たちの生活に関係するのかが分からないといった現状がある中で、いかにスポーツやオリンピック・パラリンピックに直接に関係がない方々に、この開催が自分たちの生活やこれからのまち・未来にどう影響するかということ、強く明確に伝えることが重要ではないかということで、興味関心が薄い、賛成でも反対でもない中間層の方々に向けて、また未来のために、若者に刺さるメッセージ・スローガンであることが重要ではないかという意見も多く出ておりました。

また、なぜ日本なのか、なぜ札幌なのか、なぜ今なのか、オリンピックを通じてどう変わるのか、そういったことをこれまでの反省を踏まえ、レガシーを継承しつつ、オリンピックがスポーツの祭典ということだけではなく、スポーツの力で、社会や日々の生活・まちを変える力を持っており、持続可能で心豊かな多様性を包括した共生社会・まちづくり・人づくりを後押しするプロジェクトであるということ、ゴールを見据えたレガシーをスローガンとして打ち出すべきではないかというご意見。

また、社会を変化させる未来のために、私たちが勇気を持って一歩を踏み出すこと、一致団結しようという強いメッセージや、希望・感動・期待感・笑顔・ワクワクといった感情表現も、若い世代や不安を持っておられる方々にも伝わる表現ではないかということ。

そして、新聞の見出しのように、インパクトのあるシンプルな表現で発信していくことが重要であろう、というようなことが主な意見でございました。

そういったワーキンググループで出ました様々な意見をお聞きいただきました上で、短い時間ではありますけれども、皆様にもぜひ

今回のメッセージ・スローガンに関する方向性やご意見、またインターネット投票も含めました活用方法など、様々なご意見をいただければと思いますので、よろしく願いいたします。

ご意見をいただく前に、事務局よりメッセージ・スローガンの具体例を皆様に配付させていただいているかと思っておりますので、こちらの説明をさせていただいた上で、皆様からのご意見をいただければと思います。

それでは、事務局よりご説明をお願いいたします。

事務局 (梅田スポーツ局長) それでは、事務局からメッセージ・スローガンの具体例について説明いたします。

まず、大会開催の方向性を表した「メッセージの例」と、次に説明いたします「3つのスローガンの例」につきましては、あくまでも、皆さんの意見やアイデアをいただきやすくするための「例示」として提示させていただくもので、この例を検討の前提にしたり、順位付けしたりするものではございませんので、ご了解をいただきたいと思っております。

まず、「メッセージの例」について、ご説明いたします。

これは、プロモーション委員会での開催意義のこれまでの議論を踏まえて、大会開催の方向性を短く平易な言葉で表したものです。

先週のワーキンググループの会議の中で、スローガンとの違いがわかりづらい、という指摘もありましたので、この段階では、あくまでも大会開催の方向性をわかりやすく整理した文章とご理解いただければと思います。

内容ですけれども、ここではスポーツがまちと人に希望を与え、将来にわたって活気をもたらしていくということ、都市と自然が調和し、天然雪に囲まれた札幌のまちの魅力を再発見し、大会の発信力を活用して再発信していくということ、それぞれが自分らしく生きることができて、市民一人ひとりが主役として生きるまちを実現していくということ、そして最後に、これまでの大会と一線を画する、無駄のないクリーンで新しい大会のカタチに挑戦していくとい

った柱立ての例を示しております。

次に、「スローガンの例」について、ご説明いたします。

上の方に、「例 1」「例 2」「例 3」と記載しております 3 枚の資料をご覧ください。

例 1 は、「エールをおくろう。エールをもらおう。」というスローガンですが、こちらは「スポーツ」をより意識した方向性のスローガンでございます。

例 2 は、「100 年後のために、いま変わろう。」こちらは「まちづくり」を意識したスローガンでございます。

例 3 は、「一人ひとりが、いきる世界へ。」としており、こちらは「共生社会」をより意識した方向性としております。

それぞれの例には、大きい文字で示したスローガン例の下に、スローガンの内容を解説したのも掲載しておりますので、こちらについても参考にさせていただければと思います。

先ほども申し上げましたが、是非とも皆様には、これらの例の形式を参考にしつつ、しかしながら内容にとらわれずに、自由なご意見をいただければというふうに思います。

事務局からは以上でございます。

木村委員

はい、ありがとうございました。

ただ今の事務局からの説明を踏まえまして、皆様から自由な発言、ご意見をいただければと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

はい、高橋委員、お願いいたします。

高橋委員

ありがとうございます。高橋でございます。

もう頭が固くなっているのですが、具体的なメッセージ等の提案は無理なのですが、北海道・札幌の魅力というものを考えますと、一つは自然豊か、先ほどの井本さんのご説明の中にもあったかと思いますが、長い視野を見通して冬季のオリパラができそうな都市は、世界の中で札幌だけと、既に行った都市としては。

やはり、自然の豊かさを入れ込むことが重要なというのの一つ

と、それと、私も札幌市民として生活をし出して 20 年ぐらいになりますけれども、伸び伸びとして自由な発想の多様な価値観、札幌市民が持っている他の地域の方々との比較において、その市民性みたいなことも何かうまく表現できればいいのかなど、以上であります。

木村委員

はい、ありがとうございました。

他に何かご意見のある方はいらっしゃいますでしょうか。

はい、狩野委員、お願いします。

狩野委員

そもそもお聞きしたいことではあったんですけども、既に今は「2030、ひとも、まちも、次のステージへ」というスローガンのようなものがポスターで使われていると思っているんですけども、今回作るスローガンと、「次のステージへ」という言葉の使い分けというか、どういう使い方をしていかれるのかなというのは、お聞きしたいなと思っていました。お願いいたします。

木村委員

はい、狩野委員、ありがとうございました。

このことに関しましては、事務局からご説明をお願いできますでしょうか。

事務局

事務局から、ご説明させていただきます。

(梅田スポーツ局長)

今の「2030、ひとも、まちも、次のステージへ」というのは、まさに招致段階において、札幌が目指すオリンピックの形というものをまちづくりと絡めて表現をしたスローガンになっています。

そういう意味では、スローガンの一つではあります。

今までの議論の中で、このスローガンも一つのそういう意味では候補なんですけれども、もう少し若者に刺さるような、あるいは機運を盛り上げていくような、もう少し刺激のあるスローガン、そういったものが必要なのではないか、というような議論がありまして、今回、皆さんと改めて議論をさせていただいて、あくまで現時点において、札幌市民・道民・日本国民、最終的にはこれは世界にということなんですけども、どちらかというと、地元の機運を盛り上げていくためのメッセージ・スローガンとして、もう少し分かりやすいものがあっていいのではないかとということで、今回ご検討さ

せていただいているところでございます。

狩野委員

わかりました。ありがとうございます。

以前に、河合委員と話をした時に、「すごく良いスローガンだね」という話をみんなですしていたので、今後も併用していくという認識で、プラスアルファでもっと分かりやすいものを、という認識で大丈夫ですか。

事務局

(梅田スポーツ局長)

はい、新しいスローガンと、今の「2030、ひとも、まちも、次のステージへ」をどう使い分けていくかということも含めて、これからご検討をしたいというふうに考えてございます。

狩野委員

わかりました。ありがとうございます。

木村委員

はい、狩野委員、ありがとうございました。

第1回ワーキンググループの方でも、そのお話が結構出ました。「2030、ひとも、まちも、次のステージへ」というスローガン・表現というのは、分かりやすく良いよね、という意見もございました。

ただ今、事務局よりお話がありましたように、どう扱っていくか、まさにこれをスローガンの案にするのかということも含め、皆様と議論をして進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

それ以外に、会場の皆様の中で、何かご意見やご発言ある方いらっしゃいますでしょうか。ぜひ限られた回数の中で見出していくこととなりますので、活発にご意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

はい、森副会長、お願いします。

森副会長

ありがとうございます。

このメッセージは、極めて大事だと思うんですけども、非常にわかりやすいメッセージというのは大事で、ただインパクトに欠けるという今のお話の中で、今回までしてきた議論の中で、やはり市民の参加というのがすごく大きなテーマだと思っていて、結局自分ごとだという風に思ってもらえないとうまくいかない。

ところが、きれいなメッセージを出すと、それは、それこそ新しいマンションの建設とか、何となくありふれたことがイメージできてきれいなんだけど、何か自分には関係ないという風に終わってしまう感じがすごくします。

それで、今いろいろ逆風も多い中で、この時点でやるとすると、できないということ、できるということを感じてもらわない限りは、なかなか新しい感情が芽生えてこないのかなという気がします。

したがって、スローガンやメッセージは、少しインパクトの強いものを敢えて入れていただいて、信用してくれと、信用してもらえないと、いくらきれいな言葉を並べても、何の役にも立たない、むしろ逆効果のような気がするので、ここは我々自身がチャレンジして、思い切った言葉を出すというのも、一つの方法なのかなと。

そこに、多くの方に本当かなというような意味でも、本当にできるのということも含めて、まず意識を高めてもらうことが今必要な気がします。

木村委員

はい、ご意見ありがとうございました。

はい、ありがとうございます。 河合委員、お願いします。

河合委員

ありがとうございます。いろいろな議論がなされていく過程だと思うので、これまで私もいろいろな開催意義とか、いろいろな場でお話しして、多様性的な部分をどういう風に入れていただくか。

また、今日もあったように、自然との調和という部分も非常に大きなテーマでありながら、それらを一つのメッセージ、ワンセンテンスで表すというのは、なかなかハードル高いなと改めて感じながら、今お聞きしていました。

例えば、先程「2030、ひとも、まちも、次のステージへ」というのが一つと考えた時に、「ひとも、まちも、」って何かすごく第三者的ですね。先程も森副会長からあったように、当事者性を市民の皆さんに持ってもらいたいんだったら、例えば「私も、まちも、次のステージへ」とか「私達も」とかみたいな、もっと一人称で語れるような言葉を入れていかないと、なかなか刺さらないのかなと個

人的には思いました。

当然、若者を意識しつつ、そして未来に対して夢とか希望みたいな明るさを伝えつつ、おそらく 2030 年という時は、次の 2040 や 2050 を見据えた何かを打ち出していくタイミングになっていくというのを前提にしたスローガンやメッセージが、今我々の中でも少し議論しながら提案できると良いのではないかなと思いました。

以上です。

木村委員

はい、貴重なご意見をありがとうございました。

永瀬委員、よろしく願いいたします。

永瀬委員

永瀬です。ワーキンググループのメンバーであるんですが、先程森副会長から話があったところが、私もすごく気になっているところで、今回難しいのは、その招致というか、開催が決まってからどういう大会を目指そうというスローガンと、今、招致を決めるかどうか、特に招致をしてもいいんだろうかみたいな段階でのスローガンというところで、結構この違いが難しいのではないかなと。

やっぱり議論していくと多分「こういう大会にしたいよね」という話になっていくと思うんですけど、まだ世の中の的には「ちょっと待ってよ」みたいな段階があるので、そこで、今は正直、支持率を上げるというか、機運を上げる、支持を上げるというところがすごく大事なのかなと。

理想は多分、共生社会とか SDGs、それは多分全員賛成だと思うので、それは別に悪くないしそういう風に社会になって欲しいし、オリンピックもそういう風になって欲しいと多くの人は思うけれど、「でも何で招致するの」というのは多分、昨今の日本の報道の状況を見ていると、多くの国民がそこに引っかかっているんで、どこの心に刺さるのかなというインパクトをうまく整理していけると、そうやっていって決まったら、そういうのを目指そうっていうところの 2 段階であると良いのかな、というふうに私もグループの中で発言をしていたのですが、そこがものすごく難しいなと感じています。ありがとうございます。

木村委員

はい、永瀬委員、ありがとうございました。

今お話がありましたとおり、本当に様々な意識レベルがございます。そんな中で、今は関心があまりない中間層の方々、若い世代の方々にどう刺さる表現をするかといったところで、先程ご提案をいただきましたような形で、具体的なジャストアイデア等々があれば、是非いただけるととてもありがたいなと思いますし、忌憚のないご意見をいただければと思います。

それでは、オンラインのご参加の皆様からも手が挙がっているということで、伊達委員、よろしく願いいたします。

伊達委員

はい、ありがとうございます。

(オンライン)

「2030、ひとも、まちも、次のステージへ」という言葉、キーワードは客観的に聞いて、とても期待ができるなと思います。かつ、開催したいと思っている側が主体となって「こうなって欲しい」という思いが伝わってくるという意味で、ファーストコンタクトとして、とても良いと思います。

ただ、時間が経ってくると、結局、次のステージって何、どういうイメージなの、と疑問に思うのが普通だと思います。

そういう意味では、招致できたのであれば、是非目指したいまちの姿のイメージであるとか、次のステージとしてなって欲しい人の姿のイメージをどういうふうに描くのか、そのイメージを出しながら言葉にしていく、サブタイトル的なものかもしれませんが、そういうものも必要なのではないかなと思いました。

また、途中で河合委員の話にもあったように、この言葉自体は良いけれども、やはり第三者的で、当事者的なイメージが無いような気はしました。

先ほど前段の井本さんのお話の中で、慶応の生徒さんたちのプレゼンの言葉が刺さるものがありましたということがあっと思うんですけども、世界に貢献できるとか、挑戦する力とか、というものをこの会を通して表現していきたいという言葉は、非常に刺さると思いました。

結局、それは個々人、自分自身がそういう人間になるぞと、それにチャレンジしていくんだよ、そういう場にしていこうよ、という一人称、主語としてのあり方というのが、その中から読み取れているから、感動というか刺さるんだなと風に思ったので、そのあたりでどこから第三者的にするのか、当事者にするのか、かつその人自身が目指さなきゃいけないものと、できれば個人の生活感と共感できるようなものに表現していくのか、というところが重要なのではないかと、素人ながら思いました。 以上です。

木村委員

はい、伊達委員、ありがとうございました。

それでは、他に会場の皆様、インターネットでご参加の皆様、ご意見はございませんでしょうか、はい、ありがとうございます。

それでは菅谷委員、よろしくお願いいたします。

菅谷委員

はい、ありがとうございます。

(オンライン)

私もイメージ的なものしかないんですけども、オリパラというイメージをもう少し取り入れてもいいのかなと思います。

スポーツの世界で努力の集大成が、花開くということがすごく感動になり、それが若者たちの目指すものにも繋がってくると思いますが、その感動のために、元気をもらってそれで私たちが次世代にバトンを繋いでいくんだというところに、私の中でオリパラを周知するイメージがあるので、もう少し、スポーツが機運を上げるとか努力をしている見本を私たちも見習って次のステージに行くんだ、みたいなイメージが出せると良いと思いました。

すいません、雑駁な意見で失礼いたします。

木村委員

はい、ご意見ありがとうございました。

それでは、何か他にご意見やご発言をいただけますでしょうか。

芦立委員、お願いします。

芦立委員

芦立でございます。

いただいたお話で感じましたのは、今日冒頭で山下会長と秋元市長の連名で、大会に向けての考え方をお示しされたわけですが、そのことも考えていますと、先ほどからお話が出ている今のス

ローガンのところ、例えば、今までとは違うというところを「ステージ」という言葉を使えば、例えば「新しいステージ」のような形にして、「ひとも、まちも、大会も新しいステージへ」というところを例えば示してみるなど、まだ当然、ここに書いてあるように、事案として何か固まったものが出ているわけではなくて、報道ベースの部分で起訴状が出ているところがあるかもしれませんが。

だから、ここで考えないといけないのは今までとはちょっと違うスタンスでしっかりやっていくという決意は、この中へ出ているとすれば、そこら辺がその大会のメッセージとしてなのかどうかは、まだ難しいところはあると思いますけれども、市民の皆さんや国民の皆さんに、なぜこの段階で招致をやっていくのか、ということ伝えるメッセージとして、何らかの工夫がいるのかなと思ひ拝聴しておりました。

当然、コピーライターではありませんので、専門的なことは申し上げられないのですが、視点としては何らかのそういうところを入れられないかなと思って伺っていた次第です。以上です。

木村委員

はい、ありがとうございました。ひとと、まちと、そして新しい視点として大会も変わっていくということで、貴重なご意見ありがとうございました。 荒井委員、よろしく願いいたします。

荒井委員

荒井です。今の芦立さんと同じ趣旨になると思います。

やはり変わっていくということがですね、元々2030はSDGsのゴールの年でもありますし、気候変動含めて、世の中を変えていくという取り組みを人類共通にしていくターゲットイヤーだったというふうに思いますし、そのタイミングでオリンピック・パラリンピックを招致しようという志ですね、やはりそれは、まさに当事者意識を持って変わっていくという話だと思います。

先程も「2030、ひとも、まちも、次のステージへ」というのが、少し当事者性が少し薄いねと言われれば、確かにそうかもなというふうにも思いましたし、それを変わっていくものを実現していくのが我々なんだということです。

特に、今日の冒頭の東京 2020 がこういう形で、非常に残念な今現状にあるものを、我々札幌市民・北海道民が次のステージに変えていくことが必要かなと思います。

そう思うと、ちょっと僕もプロのコピーライターではありませんけども、最近ではウェブ 3.0 みたいな言い方もありますけども、例えば、オリンピック 3.0 みたいなものを我々が実現する。

1.0 が近代オリンピック、2.0 が例えば商業主義なオリンピックだったとしたら、では、オリンピックの 3.0 というものは、どういうものなのか、我々の手に取り戻したオリンピックというのを実現する、それと同時に僕たちも行動変容していく、そんな何かニュアンスがあるといいかなと思いました。 以上です。

木村委員

はい、貴重なご意見ありがとうございました。

変わっていくということを強くメッセージとして発信していく、変わっていくそして、私たちが共にというところで、方向性としてのご意見をいただきました。本当にありがとうございます。

それでは、もう少しお時間がございます。せっかくです。

はい、牧野委員、よろしく願いいたします。

牧野委員

牧野でございます。私もこのワーキンググループのメンバーに入れていただいておりますけれども、やはりメッセージってすごく重要だと思うのです。

短い言葉の中に、いかに人の心に響かせるか、印象に残ってもらえるかということで考えると、今のオリンピック誘致はすごくいろんな問題というか、皆さんに理解していただきたいことがたくさんあると思います。

私も具体的なことは、まだ発言できない段階ではありますけれども、例えば、世界に誇れる未来の町であるとか、誇れるということ、イコールクリーンであったり、恥じない、自慢ができる。

それと若者たちも自分の町に自信を持って、そういう意味合いを持てるキーワードが入っていると良いと思います。

いろんなことにつながるキーワード、そんなものを考えていき

いと思います。

世界に誇れるようなそういうイメージのメッセージをぜひ作って
いきたいと思います。以上です。

木村委員

はい、牧野委員、ありがとうございました。

河合委員、お願いします。

河合委員

何度もすみません、いろんな皆さんの意見を聞きながら思ってい
たことを少しお話させていただければと思います。

まずスポーツのイメージをどう入れるかっていう話もあったかと思
っていて、いくつか案の中にあった希望とか笑顔とか感動みたい
なものを、例えば、地道にこうやっている部分、努力みたいなこと
を積み上げるみたいな言葉と重ねたようなことを入れてはどうか
なと思いました。

と言いながら、町とか今もあるインフラも含めて、少しずつ変え
ていかなければならない部分と、この大会を通じて新しいステー
ジ的なイメージとでイノベーションを起こしていく。

イノベーションの言葉わかりにくいのでちょっと違う言葉がいい
と思いますが、DXも含めて変えていきたいという思いが入って
いくと、改めて良いものになるのではないかなと感じました。以上です。

木村委員

はい、河合委員ありがとうございました。

小玉さま、よろしくお願いいたします。

小玉副知事

北海道副知事の小玉でございます。

(鈴木副会長代
理)

牧野委員のお話を聞いていて、私もそこが重要かなと思いました。

というのは要素のところ、世界から見て、2030が札幌で行われ
ることの価値というものが、わかるような表現があると良いのかな
と思っておりました。ただ、例示を見ますと、若干そういう感じは
含まれているなというふうに思いました。

ですから、故郷が世界に誇れるムーブメントを起こせるんだとい
う誇りに思えるようなことを発信していく、盛り込んでいくことが
機運を高めるのかなというふうに思います。

そういう意味では、天然資源が豊富だということとか、自然が豊

かである、そして、先ほど高橋委員からもございましたけど、札幌市民の気風といいますか、多様性を包摂する、そして創造的な気風といったものも一つ誇れるものになるのではないかなと、そういう要素が入っていると良いのかなと思いました。

木村委員 はい、ご意見ありがとうございました。

井本委員、よろしく願いいたします。

井本委員 簡潔に述べさせていただきます。

(オンライン) 本当に皆さん仰っていることに、私も一つ一つ同意です。そもそもスローガン作成はとても苦手なんですけれども、先ほど荒井委員がおっしゃっていた、新しい形のオリンピックということを出すということは、今のこの問題ですとか、事件が起こっていることに対して、その不安を払拭するような今までの在り方をしっかりと変えていって、市民が主役になるということ。

市民にオリンピックのオーナーシップを持たせるというようなメッセージを前に出していくこと。

それがどんな言葉になるのか、少しわからないんですけれども、「オーナーシップは市民にある」ということを訴えられるような内容が良いのではないかとということを感じました。以上です。

木村委員 はい、井本委員、ありがとうございました。

もう少し大丈夫なんでしょうか。あとお時間もわずかになってまいりましたが、せっかくですので、他に何かご意見のある方はいらっしやいますでしょうか。

たくさんご意見をいただきまして、本当にありがとうございます。

世界から見て、本当に天然資源が豊富なこの札幌で行うことの意味や意義、そして市民、道民の方々が誇りに思えるようなメッセージが含まれていること、そして今までとは違う、変わっていく、変えていこう、ひとも、まちも、そしてオリンピックも、この大会も変わっていくという姿勢を示すというようなこと。

また、きれいすぎた言葉では伝わらず、他人事ではなく、自分ごととして簡潔でインパクトが強いものであるべきだ、ということで

例えば、オリンピック 3.0 ですとか、様々な具体案もいただいております。

そんな中で、意識レベル、市民道民の皆様の意識レベルというものの段階があり、ファーストコンタクト、そしてどの程度の当事者性や表現を表すべきか等々、さまざまなお話をいただきました。

この内容を踏まえまして、次回第 2 回ワーキンググループでは、さらに内容・表現・ワード等々をブラッシュアップして、皆様にお示しをさせていただきたいと思っております。

他にご意見やご発言よろしいでしょうか。

はい、ありがとうございます。 永瀬委員、お願いします。

永瀬委員

永瀬です。ワーキンググループの中でも確認したのですが、多分この場に出てくる時は、報告の時点になってしまうという流れになってしまっているのです、私はそれで良いのかなと、ワーキンググループ発言させていただきました。

あとはワーキンググループだけの、インターネットもありますけど、やはりこういったプロモーション会議の場があって、ある程度こう文言がないとイメージを掴めないと思います。

それで、皆様からもこうやって意見がある中で、事務局が提示していただいた流れでは、10 月 27 日に発表という段階になってしまうので、いろいろな物事を決める進め方が、それこそ東京大会でいろんな課題が出てきたと思います。そういった中で、私はワーキンググループに入っているのですけれども、この場の存在が報告になってしまって良いのかなというのが一つ思います。

木村委員

はい、ご意見ありがとうございます。事務局からお願いできますでしょうか。

事務局

ワーキンググループの中でも、長瀬委員からどうやって、これを（梅田スポーツ局長）プロモーション委員会として最終的に決定していくかという観点でのご発言がありました。

具体的な案を作っていく段階で、プロモーション委員会の委員の皆様には情報提供をさせていただいて、ご意見を賜る場というもの

は設けながら進めていきたいというふうに思います。

今はまだいろんな意見を頂いて、どういう視点で、どういうところに軸足を置いたスローガンを作っていくか、という段階でございます。

今日までの意見を踏まえて、より具体的なものをワーキングの方で詰めさせていただこうというふうに思っておりますので、その段階で、皆様には情報を提供させていただきながら、また当然、投票の案を作成する段階もございまして、そういった形で進めさせていただければというふうに事務局として考えてございます。

以上でございます。

木村委員

はい、ありがとうございます。

今ご説明ありましたとおり。今回は方向性を皆様と共有するために場を持たせていただきました。

また、ぜひ具体的な、ジャストアイデアでも結構なので、こういったワードはどうかですとか、スローガンはこういう内容はどうかですとか、そういったこともご意見があれば、事務局を通じていただければと思いますので、よろしく願いいたします。

それでは、時間が近づいてまいりました。

最後に、役員の皆様で、ご発言はございますでしょうか。

秋元会長代行、よろしく願いいたします。

秋元会長代行

ありがとうございます。井本委員に最初にご報告いただいてありがとうございます。SDGs・スポーツを通じて、様々な社会課題を解決していく、その大きなテーマの中で、環境問題・SDGsへの目標達成ということ。これは、今回の北海道・札幌オリンピック・パラリンピック大会招致の大きなテーマの一つだというふうに思っております。

今日、さまざまな形でスポーツを通じて、改めて社会課題のいろいろな解決をし、まちを変えていく地域を変えていく、そういう一つのきっかけとして、このオリンピック・パラリンピックの招致ということを申し上げてきた訳でありますけれども、そういった中

で、今日はスローガンの話でいろいろなご意見をいただきました。

そういった思いとか、皆様の考えということも入れて、わかりやすい言葉で提示をしていって共感をいただく、自分ごととして考えていただく、ということはこの後も進めていかなければいけないということを改めて感じさせていただいたところでもあります。

引き続き、皆さんと一緒にこの招致活動を取り組んでいきたいというふうに思います。

いろいろなネガティブな情報というようなことが出てまいりますので、「変えていくんだ、変わっていくんだ」ということをやはり強く出していく必要があるのかなということを改めて感じたところでもあります。ありがとうございます。

木村委員 はい、ありがとうございました。皆様、本当に大変貴重なご意見多数いただきまして、ありがとうございました。

本日いただきましたご意見をもとに、また第2回ワーキンググループで内容等々を詰めて進めていきたいと思えます。ありがとうございました。

それでは、進行を岩田会長にお戻しいたします。

岩田会長 皆様ありがとうございました。引き続きワーキンググループで、策定に向けまして作業を進めていただきますので、よろしく願いいたします。

本日の議事は、以上でございます。皆様のご協力に改めて感謝を申し上げます。ありがとうございました。

事務局へ進行を戻します。

事務局 それでは、事務局からご報告いたします。次回の会議につきまして

(梅田スポーツ局長) ては、10月27日 午前9時から、札幌市内の会場とオンラインのハイブリッドで開催いたします。

次回のテーマについては、開催意義のとりまとめ及びメッセージ・スローガンに関する内容を予定しております。詳細については、別途ご連絡をさせていただきます。以上でございます。

これで第4回北海道・札幌2030オリンピック・パラリンピック

ロモーション委員会を終了いたします。

長時間の会議、皆様ありがとうございました。

この後、囲み取材を行いますので、準備ができましたらご案内させていただきます。関係の方はよろしくお願いたします。

以上でございます。

第4回 北海道・札幌 2030 オリンピック・パラリンピックプロモーション委員会
出席者一覧

(五十音順・敬称略)

役 職	氏 名	所 属 等
特別顧問	橋本 聖子	北海道オール・オリンピアンズ 代表 スポーツ議員連盟 副会長 2030年オリンピック・パラリンピック 冬季競技大会招致議員連盟 会長
顧問	室伏 広治	スポーツ庁 長官
会長	岩田 圭剛	北海道商工会議所連合会 会頭 札幌商工会議所 会頭 冬季オリンピック・パラリンピック札幌招致 期成会 会長
会長代行	秋元 克広	札幌市長
	山下 泰裕	公益財団法人 日本オリンピック委員会 会長
副会長	小玉 俊宏	北海道副知事（鈴木副会長代理）
	森 和之	公益財団法人日本パラスポーツ協会 会長 日本パラリンピック委員会 会長”
委員	芦立 訓	独立行政法人 日本スポーツ振興センター 理事長
	荒井 ゆたか	スポーツ議員連盟 2030年オリンピック・パラリンピック 冬季競技大会招致議員連盟
	伊藤 雅俊	公益財団法人 日本スポーツ協会 会長
	井本 直歩子	一般社団法人 SDGs in Sports 代表
	太田 渉子	パラリンピアン（スキー・ノルディック）
	岡崎 朋美	オリンピアン（スピードスケート）
	狩野 亮	パラリンピアン（スキー・アルペン）
	河合 純一	日本パラリンピック委員会 委員長

木村 麻子	日本商工会議所 青年部 (株式会社P R 代表取締役)
菅谷 とも子	A N A あきんど株式会社 代表取締役社長 (日本経済団体連合会推薦)
高橋 はるみ	スポーツ議員連盟 2030年オリンピック・パラリンピック 冬季競技大会招致議員連盟
伊達 美和子	公益社団法人 経済同友会 副代表幹事 (森トラスト株式会社代表取締役社長)
永瀬 充	パラリンピアン (アイスホッケー)
原田 雅彦	オリンピック (スキー・ジャンプ) 公益財団法人 日本オリンピック委員会 理事
牧野 准子	ユニバーサルデザイン 有限会社 環工房 代表取締役
マセソン 美季	国際パラリンピック委員会 理事
米沢 則寿	帯広市長